

## ヒュームの初期覚書<sup>1</sup>、1729-1740 (2)

諸言と編：アーネスト・キャンベル・モスナー

翻訳：竹中久留美

### 第1節 自然哲学

1. 船はいつも、舷側が少したわむとき、もっとも早く進む。
2. 互いに寄りかかっている二本の木は、その切り口の間隔に筋交いに置かれたそれら両方と同じだけ重みを支えるだろう。
3. 煨焼されたアンチモンはそれ以前よりも重い。
4. 自然哲学がそのうちに真理を持たないということの証拠は、それが天空の神々のように離れた、あるいは光のように微細なものの中に継起してきたにすぎないということだ。
5. おそらく、鉱水は、鉱物の層を流れてくることによってではなく、これらの鉱物を形作る蒸気を吸収することによって作られるのであろう。
6. 熱い鉱水は冷たいものよりすぐに沸騰しない。
7. 冷たい水に入れられた熱い鉄は、すぐに冷たくなる。しかし、再び熱くなる。
8. バリではたいてい、6月、7月、そして8月にほかの9か月間と同じくらいの雨が降る。
9. それらがほとんど不愉快であり、人生の共通の効用の範囲外であるということは、医薬に対する強力な思い込みであろう。というのは、共通の食品などの弱く不確かな効能が経験によってよく知られているからである。これら以外は、インチキ医者よりも格好の的である。

### 第2節 哲学

1. 剣闘士の見世物の残酷さにもかかわらず、ローマ人たちは人間性の多くの徴候を見せている。テーブル掛けを盗んだために熱い鉄で奴隷を焼きつけることは、残酷さの一端とみなされた。ユウエナリス。風刺 14。
2. 注意深く入念すぎる教育は有害である。なぜなら、(彼らの<sup>3</sup>) その判断に代わって、他者を信頼するよう人に教えるのだから。デュボス司祭。
3. ある若い人にとって、その人は彼自身を学芸や知識に応用するのだが、彼自身を世界のために鍛える緩慢さは良いしるしである。同上。
4. 古代人たちはしばしば、類まれな数の内にいる神について語るけれども、神の唯一性を信じることで、それを彼らは証明しない。なぜなら、キリスト教信者は、(唯一性) 悪魔についても同じ仕方でも語るからである。ベール<sup>4</sup>。
5. 異教徒たちの告白は、無神論者たちに反するキリスト教徒たちの告白と結び付けることはできない。なぜなら、神は存在し、そしてそれ以上が存在する (七ない) という一つの命題を彼らは決して形作らないからである。これら二つの主張は、いつも同じであった。同上。
6. 人間は、痛みを憎む以上に快楽を愛する。同上。
7. 人間は、悪徳である。が、悪徳を正当化する宗教を憎む。同上。

8. 宗教に関するすべての人の統合の中心は、第一原因があることである。その命題を増加するにつれ、非国教徒を見出す。無神論者たち、エピキュリアンたち、偶像崇拝者たち、そういう者たちは、拡張構成、つまり第一原因などの必然性を主張する。同上。
9. ジェズイットたちの哲学的罪悪を否定する者たちは、人間が彼らの罪のために永遠の処罰に値すると主張する。彼らは自分たち自身を教授するに決して十分な手段を持たないけれども。
10. 無神論者たちは、明らかに良い推論と悪い推論の区別をしている。なぜ悪徳と徳の間にしないのか。ベール。
11. 古代哲学者たちの情感について私たちが持っている説明は、十分に判明であったり首尾一貫したりしていない。タレスが心による世界の秩序づけを認めたということと、アナクサゴラスが初めてであったと言っている二つの文章で、キケロは矛盾したことを言っている。
12. あるものによると無神論には三種類ある。1. 神の存在を否定するような人たち、それはディアゴラスやテオドルスのような人たちである。2. 摂理を否定する人たち、それはエピキュリアンたちやイオニア派のような人たちである。神性の自由意思を否定するような人たち、それはアリストテレスやストア派のような人たちである。などなど。
13. イオニア派の情感について私たちが持っている最も確からしい説明は、あらゆるものの起原をタレスが水から、アナクシマンドロスはものの無限から、アナクシメネスは空気から、アナクサゴラスは彼の同祖からと主張したということである。ヘラクレイトスは火から異なる学派の起原を主張した。
14. ストラトリーの無神論は、自然からの世界の起原あるいは活動を受ける物質を考えるので、古代人の最も危険なものである。デカルト派たちが、この無神論を論駁できるのでなければ誰もできないとベールは考えている。
15. ストラトリー主義者は、哲学の学派すべての議論に反駁できない。ストア学派者たちについて、彼らは彼らの神は激しく複合的であると主張し、プラトン主義者たちについては、彼らは観念が神性から判明であると主張する。なぜ神の資質や観念がある特定の配列を持ったのかという同様の問いは、なぜ世界を持ったのかというと同様の困難さである。
16. アプリオリな議論。必然的な実在の存在が限定されえないということは、無限の完全性の観念を先立って形成し、彼の模範まで上り詰める決意をするある知的存在者がいるという結論にただ役立つだけである。このことは矛盾を含意する。ベール。
17. プラトンとキケロは前者と同様後者も魂の永遠性を主張した。さらに、動物のそれをも主張すべきだった。
18. キングによれば、病に3種類ある。欠乏、痛みと悪徳についての病である。最初のは、創造における欠点ではない。なぜならば、創造物の様々な階級があるからである。
19. 人間は、有害なものを避け、痛みによるのと同様快樂（痛み）の増加と減少によって、有用なものを探すよう決定されてもよかった。人間は、天国では痛みを負わないと想定されている。ベール。
20. 病の起原に関する困難を一般法の弁解によって解く人たちは、世界の創造における善性に加えて、別の動機を想定している。
21. 物質は、すべての種類の運動と目的に無関係である。白紙委任の魂は、すべての知覚に無関係である。それなら、有害な運動あるいは不愉快な知覚には何が必然なのか？宇宙が形作られたであろう多くの計画がある。現在より良いものは何もないということはおかしなことだ。ベール。
22. 自由は私たちが好むだけ物事を快か不快にする力に存すると、キングは言っている。
23. 自由は、道徳的な病の適切な解法ではない。なぜならば、それは聖人と天使たちのような動機によって縛られてきたからである。同上。
24. 神は、自由のない創造物の行為を喜ぶことはできない。しかし、彼はその自由の濫用を喜ぶことができるだろうか。同上。
25. 彼は、人間彼ら自身を喜ばせるために自由を与えたのか。しかし、人間はなおその上よいと決められることを喜ぶ。同上。
26. あらゆる不便さの治療法は、一つの新しいものになるであろう。解答はないのである。天賦の才で計画された著作からの比較の中に、偶然が美を見い出す。

27. 結婚、交接などのつまらない偶然を考察することは、魂の不死に対する一種の反論のように思える。
28. 学識があり洗練された国々より野蛮で無知な国々に無神論を見出すことは、人類についての普遍的な同意から引き出された無神論に反する議論へのより強い反論である。ベール。
29. ローマ人の最高の至上の神性は、ジュピターではなく、スマヌスである。ローマ人は、彼に夜の雷が属すると考える。ジュピターの美しい寺院は、形勢が一転した。同上。
30. 自由に抗する議論は、保存は連続創造であり、そしてそれゆえ、神はあらゆる新しい変容とともに魂を想像したはずであるということに由来する。同上。
31. ある原因は必然的かどうか？ある永遠的存在者にとって必然的かどうか？連続する存在者のあらゆる新しい瞬間において必然的かどうか？動きにおいて必然的かどうか？
32. 神は、自由を取り上げることなく、自由の濫用すべてを防ぐことができている。それゆえ、自由は困難の解法ではない。ベール。
33. カルヴァンによれば、神は罪としてではなく、何か他の見解において罪を意志する。同上。
34. 理性に反する：理性の上にある。人間の理性：神の理性。同上。
35. 無神論の体系によって、必然性はある得ないということはある人たちは主張する。なぜならば、それを裁定するための優れた何ものかなしには、問題さえ裁定され得ないからである。フェヌロン。
36. 存在者と真理と善性は同一である。同上。
37. 神の存在に向けた三つの証明。1. 何ものかが必然的に存在するならば、そのようであるものは無限に完全である。2. 無限の観念は、ある無限な存在者から生じなければならない。3. 無限な完全性の観念は、現実的実在の観念を含意する。同上。
38. 脳についてのデカルト哲学を確証する注目すべき話がある。落馬で負傷したある人は、彼の人生の二十年について忘れてしまったのに、その前のことを普通よりましてやもっと生き生きとした仕方覚えていた。
39. すべての儀式に実践されるべき多くのしきたりなしには、宗教は有効には自らを維持できない。それゆえ、聖職者たちは、理由を知ることなく、道徳的務めよりこれらについてさらに厳格である。この種の隠れた天性というものがあるのだ。
40. カドワースによれば、四種類の無神論者たちがいる。デモクリトス的すなわち原子論的、アナクシマンドロスのすなわち物覚<sup>5</sup>的、ストラトンのすなわち物活的、ストア的すなわち宇宙形成的な無神論である。それらに、ピュロンのなると懐疑論的なものも加えていた。それから、スピノザ的すなわち形而上学的な無神論だ。誰かもしかしたら、化学的アナクサゴラス的すなわち化学的なものを加えるだろう<sup>2</sup>。

(以下、「ヒュームの初期覚書 (3)」へ続く。)

## 編注<sup>6</sup>

- 1 節と注の番号付けは、編者によるものである。(以下略。)
- 2 この節の最後の用紙の裏側には、ヒュームがキケロカポリュビオスのどちらかに見出したであろうエピカルモスの一文がある。私は、その文が哲学の記録への最後の付加であると推測する。それは以下のようなものである。「落ち着き続けよ、そして懐疑的であることを忘れるな。」

## 訳注

- 3 取消線 (–) は、原文では“crossed out”である。以下の取消線も同様である。
- 4 原文では“Baile”。おそらくはピエール・ベール Pierre Bayle のこと。
- 5 原文は“Hylopathian”である。Hylopathism は、物体に知覚能力があるということを用いる。
- 6 E.C. モスナーによる注である。注1後半部は、今回の訳出には直接該当しないため省略した。本翻訳 (3) で、省略した部分も含めて同注を付す予定である。

\*本翻訳は試訳であり、また続く“Section III General”については「ヒュームの初期覚書 (3)」にて訳出予定である。